

# ロマ書 1 章 17 節 a の ἐκ πίστεως εἰς πίστιν の解釈について

武 久 盾

## はじめに

ロマ書 1 章 16-17 節<sup>1</sup>では、手紙全体の主題が述べられる。その内容は、「神からの義（δικαιοσύνη θεοῦ）、すなわち救い（σωτηρία）は福音（εὐαγγέλιον）として啓示される（ἀποκαλύπτεται）」である。このパウロ独自の救済論の根拠づけが義認論であり、その機序は、δικαιοσύνη と不可分の πίστις の働き、つまり「πίστις から πίστις へ（ἐκ πίστεως εἰς πίστιν）」と展開される。宗教改革期以降の ἐκ πίστεως εἰς πίστιν の伝統的理解では、パウロの強調点は ἐκ πίστεως にあるとされ、これを強調表現として「信仰のみ（*sola fide*）」の文脈で捉えてきた。その趣旨は人間の努力では救いに到らないことである。しかし、ἐκ πίστεως εἰς πίστιν はパウロ独自の表現であり、かつパウロ書簡の中で他に用例がなく比較が容易でないことから、その解釈をめぐる議論が続いている。

前提として、εἰς πίστιν は ἐκ πίστεως の繰り返し（前置詞句による類語反復）である。ここで、問題の所在は、おおよそ以下の 3 点に絞られる。

- ① 2 箇所の、定冠詞・規定語のない独立の πίστις の主体は誰で、そもそもの意味は何か？
- ② その繰り返しは、強調表現に過ぎないのか？
- ③ それとも文法構造として、2 つの前置詞によって方向性が付与された異なる πίστις か？

一方、昨今の New Perspective<sup>2</sup> の潮流の中で、ロマ書 3 章後半の解釈から、「ただ人間の信仰による（*sola fide*）」のではなく、「キリストの信仰／誠実さ」による参与

1 ロマ 1:16-17<sup>16</sup> すなわち、私は福音を恥としない。なぜなら、（それは）全ての信ずる者たちにとって、第一にユダヤ人にとって、またギリシャ人にとっても、救いへの神からの力であるから。<sup>17</sup>なぜなら、神からの義はその「福音の」中に、πίστις から πίστις へと、啓示される。「πίστις からの義人は生きるであろう」と書いてあるように。

2 J.D.G. Dunn, *Word Biblical Commentary: Volume 38A, Romans 1-8*. 40-42; Horsley, R.A., *Paul and Politics: Ekklesia, Israel, Imperium, Interpretation*, 2-3. New Perspective では、義認論はパウロ神学ではなく、パウロは個人の救済を述べていないとする。個々人の内面的な自己意識はパウロの時代ではなく、1:16-17 においても信仰義認論は展開されていないとの指摘がなされている。

論 (participatory soteriology) が北米を中心に提起されている<sup>3</sup>。その場合、救済論は「キリストの義認」への我々の参与として理解される。従来の信仰義認理解とは異なり、こうした新しい解釈は、ただ「キリストの誠実さ (faithfulness of Christ)」<sup>4</sup>、もしくは「キリストの信仰 (faith of Christ)」によって、無条件に万人が救済されるという「救済論」に基づく「義認論」として位置付けられる。

本研究では、①～③の問題に加え、17 節 a の ἐκ πίστεως ἡ ἐκ πίστεως Χριστοῦ を含意するものか検討を行い、昨今の解釈の妥当性をも併せて考察したい。

### 1. 1:17a の ἐκ πίστεως εἰς πίστιν はどう解釈されてきたか？

近代以降、ἐκ πίστεως εἰς πίστιν の 2 つの前置詞句は何を指すか曖昧であり、釈義により πίστις にかかる属格の語を補う必要性が注解されてきた<sup>4</sup>。その属格の主体として、神、人、キリストの 3 者が考えられる (τοῦ εὐαγγελίου などの事物を想定して補う解釈は見られない)。先行研究をまとめると、ἐκ πίστεως εἰς πίστιν は以下のように 7 パターンの解釈がなされうる。

- i) 2 つの πίστις のどちらも、「神」の πίστις、つまり、「神が誠実である」ことの強意の意味に解釈する。
- ii) どちらも「人間 (キリスト者)」側の πίστις、つまり、「人間の神に対する信頼もしくは信仰」の強意表現とする。
- iii) 最初の πίστις を「神」の πίστις、二番目の πίστις を「人間」の πίστις の意味に解釈する。
- iv) 最初の πίστις を「神」の πίστις、二番目の πίστις を「キリスト」の πίστις の意味に解釈する。
- v) 敢えて規定語を置かず、「人間と神の双方」の意味を含蓄させているものと解釈する。
- vi) 最初の πίστις を「イエス・キリスト」の πίστις、二番目の πίστις を「人間 (キリスト者)」の πίστις の意味として、キリスト論的に解釈する<sup>5</sup>。

3 R.B. Hays, *The Faith of Jesus Christ* (2<sup>nd</sup> Edn.), 172, 213; L.T. Johnson, *Reading Romans: A Literary and Theological Commentary* (Reading the New Testament Series Book 6), 29-30.

4 R.M. Calhoun, *Paul's Definitions of the Gospel in Romans I*, 171-2. ἐκ πίστεως εἰς πίστιν が曖昧で何を指すかわからないので、解釈のためには πίστις にかかる属格の適切な語を補う必要があるとする立場に反対して、修辞学観点から議論を始める。

5 D.A. Campbell, *Romans 1:17-A Crux Interpretum for the ΠΙΣΤΙΣ ΧΡΙΣΤΟΥ Debate*, JBL 113, 265-85. 281.

vii) ἐκ πίστεως は 17 節 b からの重複<sup>6</sup> (誤写<sup>7</sup>) とみる。

伝統的には第二の解釈を採用し、πίστις を人間の側の「信仰」と解釈することで、「ただ信仰のみ (*sola fide*)」による信仰義認が唱えられてきた<sup>8</sup>。M. Wolter は 17 節 a の「信仰」の主体は 16 節 b の「全ての信じる人 (παντὶ τῷ πιστεύοντι)」とする。その理由を、πίστις には属格も形容詞もないので、もしパウロが別のことを意図していても、読み手にはヒントさえないからと注解している<sup>9</sup>。

翻訳を含め (英語訳も含む)、第一、第四の解釈の採用例はない。第五は J.D.G. Dunn らによって、「含意されているもの」として提唱されてきた<sup>10</sup>。ロマ書の導入部における 1:17 で、πίστις を包括的かつあえて曖昧に用いることで、主題として設定するパウロの意図があるとみなす。また、第三については 1919 年に K. Barth が『ローマ書 (*Der Römerbrief*)』(ただし 1922 年第 2 版の本文引用)<sup>11</sup>において、神の真実・信実 (*Treue Gottes*)、つまり神の誠実さから、それに対する人間の側の神への信仰 (もしくは信頼・忠誠) へという方向性に基づく解釈を提示した。ただ、K. Barth の解釈には反するが、ロマ書においてそもそも ἐκ πίστεως τοῦ θεοῦ という表現はなく、釈義的には、ἐκ πίστεως は 1:17 に限らず「神の πίστις」を指し示していることはない。また解釈学的に、3:3b の *Treue Gottes*<sup>12</sup> の内容を確認すると、これは「契約 (διαθήκη) の履行」という律法体系の枠組みを超えた、救済をもたらす「神の忠実さ」であるこ

6 重複を避けるために異なる前置詞句が用いられているというのは、古くはラテン教父のテルトゥリアヌスに遡る。ただ、彼の場合は、ウルガタの *ex fide in fidem* の注解である。ウルガタの 1:17 *iustitia enim Dei in eo revelatur ex fide in fidem sicut scriptum est iustus autem ex fide vivit*。

7 M. ブラック『ローマの信徒への手紙 (ニューセンチュリー聖書注解)』66。「マイケルはローマの信徒への手紙の本文の数箇所に『縦方向の重複誤写』による本文毀損を疑ったが、これもそれらのうちの 1 つであるという」。日本語訳本文で「マイケル」とされているが、これはミヒェル (Otto Michel) の間違い。引用元は、O. Michel, *Der Brief in der Römer* (KEK4)。

8 邦訳聖書においても、いずれも人間の側の「信仰」と採り、原文にない語を補って翻訳されてきた。

9 M. Wolter, *Der Brief an die Roemer: EKK NF VI/1*, 125。

10 J.D.G. Dunn, *Word Biblical Commentary: Volume 38A, Romans 1-8*, 43-4。

11 K. Barth, *Der Römerbrief* (zweite Fassung), 11, 17. Denn die Gerechtigkeit Gottes enthüllt sich in ihr: aus Treue dem Glauben, wie geschrieben steht: Der Gerechte wird leben aus meiner Treue. (神の義は、その救いの音信の中に啓示され、真実から信仰へ至らせるからである。これは「わたしの真実によって正しい者は生きるであろう」と書いてあるとおりである)。注解部分で、<Aus Treue> enthüllt sich die Gerechtigkeit Gottes, aus seiner Treue zu uns. (「真実から」、すなわち、神のわれわれに対する真実から、神の義があらわになる) との解釈を提示した。吉村善夫訳『ローマ書 (改訳: カール・バルト著作集 14)』(原著第 6 版); 小川圭治・岩波哲男訳『ローマ書講解 (新訳)』(原著第 6 版)。訳文は小川圭治・岩波哲男訳を用いた (なお、2001 年の平凡社新書・新訳は、1958 年の河出書房版の改訳である)。

12 3:3b において、人間が律法を守れず、不誠実な存在であってもなお神は誠実 (ἡ ἀπιστία αὐτῶν τὴν πίστιν τοῦ θεοῦ καταργήσει) であり続けることが述べられる。*Treue Gottes* はパウロ神学の根底にはあるが、むしろその内容は 4 章で展開されるように、葛藤の中で信じ続けるアブラハムの姿勢に対して示される、彼への約束 (ἐπαγγελία) としての「神の誠実さ」(4:13) である。「神の πίστις」が「契約 (διαθήκη) の忠実な履行」ととどまらないことは、διαθήκη が 9:4 まで出てこないことから裏付けられる。

とを指摘しておく<sup>13</sup>。

第六は、英語圏の一部で見られる参与論にもとづく近年の新しい解釈、「キリストの誠実さから信じる者全ての信仰へ」である。この説ではまず、1:17b のハバクク書 2:4b からの引用部分で、ὁ δίκαιος（義人）をキリスト論的に理解する。次に、3:22a<sup>14</sup> が 1:17a の主題の繰り返しで、ἐκ πίστεως εἰς πίστιν のうち、起点の ἐκ πίστεως を 3:22a の διὰ πίστεως Ἰησοῦ Χριστοῦ とし、帰結点の εἰς πίστιν を同じく 3:22a の εἰς πάντας τοὺς πιστεύοντας（信じる全ての者へと至る）と解釈するものである<sup>15</sup>。そもそも 1:16 と 17 は両節で、ロマ書の主題として成り立っているので、3:22a の εἰς πάντας τοὺς πιστεύοντας は 1:16b の εἰς σωτηρίαν παντὶ τῷ πιστεύοντι（信じる者全てにとって、救いへ至らせる）と呼応するとみなされている<sup>16</sup>。各章句の対応表を以下に示す（表 1）。

はじめに、ハバクク書 2:4 からの引用である 17 節 b と、17 節 a の ἐκ πίστεως に Χριστοῦ を補う必要性の可否が生じるが、そもそも読み手にとってかなり困難が伴う。加えて、Χριστοῦ を伴う主語属格ではない理由は、①パウロにとって「信じる行為の主体は人間」があくまでも前提である。パウロ書簡において、動詞 πιστεύω の主語がキリストとされている箇所は皆無である。また、パウロが πιστὸς ὁ θεός と述べる箇所

Table 1. The comparison of ἐκ A εἰς B between 1:17a and 3:22a.

	Subject	ἐκ A	εἰς B
1:16b	δύναμις θεοῦ (εὐαγγέλιον)	NA	εἰς σωτηρίαν παντὶ τῷ πιστεύοντι
1:17a	δικαιοσύνη θεοῦ	ἐκ πίστεως	εἰς πίστιν
3:22a	δικαιοσύνη θεοῦ	διὰ πίστεως Ἰησοῦ Χριστοῦ	εἰς πάντας τοὺς πιστεύοντας
3:26b <sup>17</sup>	(θεός)	δικαιοῦντα τὸν ἐκ πίστεως Ἰησοῦ <sup>18</sup>	εἰς τὸ εἶναι αὐτὸν δίκαιον

13 E.P. Sanders, *Paul: a very short introduction*, 66-7; M. Wolter, *Der Brief an die Roemer: EKK NF VI/1*, 122-5.

14 ロマ 3:22 《私訳》すなわち、イエス・キリスト（へ）の πίστις を通して、全ての人が信じる者になる、神からの義である。そこには何の区別もない。

15 εἰς πάντας τοὺς πιστεύοντας の直訳は「信じる全ての者へと至る」である。διὰ πίστεως Ἰησοῦ Χριστοῦ が目的語属格（*genitivus objectivus*）か主語属格（*genitivus subjectivus*）かは議論が続いている。前者では「イエス・キリストへの（人間の）信仰を通して」、後者では「イエス・キリストの誠実さ／信仰を通して」になる。

16 L.T. Johnson, *Contested Issues in Christian Origins and the New Testament: Collected Essays*, 242-3.

17 ロマ 3:26 《私訳》神の忍耐において。彼〔神〕からの義を、今の時に、示すために。こうして、（神）自らが義となり、さらに、イエス（へ）の πίστις による者を義となすために。

18 τὸν ἐκ πίστεως Ἰησοῦ（イエス〔へ〕の πίστις による者）と、εἰς τὸ εἶναι αὐτὸν δίκαιον（神が自ら義となる）の間には直接には方向性はない。ただし、文脈としては、「イエス（へ）の πίστις からの者」を義とするため、「神が自ら義となる」という方向性は認められる。

は、ロマ書以外では散見されるものの<sup>19</sup>、ロマ書にはない。加えて πιστὸς ὁ Χριστός と述べる箇所は一切ない。解釈が分かれている πίστις Χριστοῦ の 6 箇所以外で<sup>20</sup>、名詞 πίστις と Χριστός が繋げられている箇所、ないしは「キリストの πίστις」に言及する箇所はない<sup>21</sup>。② ἐκ πίστεως と対峙させられているのは、ἐξ ἔργων νόμου (3:20) であり、「律法の業から」の行為の主体は、議論の余地なく人間である。③そもそも 3:22<sup>22</sup> ならびに 26 節も主語属格とは解し難い。また、J.D.G. Dunn らが指摘するように、πίστις Χριστοῦ の主語属格がそもそもイエス・キリストの何を指し示しているのか、イエス・キリストの（父なる神への）信仰であるのか、イエス・キリストの誠実さであるのか、その中身が明瞭でない<sup>23</sup>。④加えて、1:17 でのロマ書の主題は、3:22a ならびに 5:17-19 で単純に繰り返されていない。したがって、3:22a を 1:17a に遡って読み込む必然性がない。⑤逆に、「イエス・キリストの誠実さ・信仰をとおして」でない理由として、「イエスがキリストである」ことは客観的事実としての絶対的真理ではありえず、主語属格は論理的破綻をきたしているとの M. Wolter の指摘も説得力を持つ<sup>24</sup>。ここで、ἐκ πίστεως Χριστοῦ は、主語属格と目的語属格の議論を超えた、*genitivus qualitatis*（質的属格）であるとの提案がなされている。つまり、これはキリストの出来事に定義づけられるところの「信者の信仰」を意味する<sup>25</sup>。

最後の第七に関しては本文批評上、支持が広がっていない。いずれにせよ、ἐκ πίστεως と εἰς πίστιν の前置詞句に何らかの属格を補うだけの解釈は決め手に欠き、また、πίστις に関しての文法的観点からだけの解釈も同様に困難である。

19 I コリ 1:9; 10:13; II コリ 1:18; I テサ 5:24.

20 ロマ 3:22, 26; ガラ 2:16<sup>2</sup>; 3:22; フィリ 3:9.

21 D.B. Wallace, *The Basics of New Testament Syntax; An Intermediate Greek Grammar; The Abridgement of Greek Grammar Beyond the Basics*, 115; J.D.G. Dunn, *Once More, ΠΙΣΤΙΣ ΧΡΙΣΤΟΥ*, 252-4. J.D.G. Dunn は、（前置詞）+ 定冠詞 + πίστις + 属格（神・キリスト・人・福音）のときは主語属格であるとし、この文法的説明は一定の説得力を持つ。この法則に従えば、パウロ書簡における πίστις Χριστοῦ は全て目的語属格となる。この法則の例外はロマ 4:16 の ἐκ πίστεως Ἀβραάμ のみであり、定冠詞 τῆς がない。ここで ἐκ πίστεως Ἀβραάμ は単なる主語属格の「アブラハムの信仰」ではなくて、*genitivus qualitatis* [英 *genitive of quality*] つまり「アブラハムに代表されるところの信仰」である。

22 3:22 では根拠を示す διὰ から結果を示す εἰς に向けて、1:17a とは異なる前置詞句が使われており、「イエス・キリストへの信仰をとおして《根拠》、全ての者が信じるようになる《結果》」である。つまりメシアである「キリスト」への信仰が、神への信仰の道筋としてキリスト論的理解によって述べられている。

23 J.D.G. Dunn, *Once More, ΠΙΣΤΙΣ ΧΡΙΣΤΟΥ*, 259, 264.

24 M. Wolter, *Der Brief an die Roemer: EKK NF VI/1*, 250.

25 メシアである「キリスト」への信仰の結果、5:19 の「一人の人の従順をとおして（διὰ τῆς ὑπακοῆς τοῦ ἐνός）」が、信者には意味を持つのであり、1:18-3:20 で述べられるように、無信仰者にはイエスはキリストでも何でもないのである。

## 2. 1:17a における ἐκ πίστεως εἰς πίστιν の文法構造について

次に、前置詞句の文法構造に絞って検討を加えたい。パウロ独自の表現である、前置詞句を重ねた ἐκ πίστεως εἰς πίστιν に関して、E. Käsemann はセム語的修辭法だと指摘した上で、強調表現とする。さらに、ἐκ A εἰς B の類似表現を挙げている<sup>26</sup>。

エレミヤ書 9:2	ἐκ κακῶν εἰς κακὰ (悪から悪へ)
詩編 (LXX) 83:8 <sup>27</sup>	ἐκ δυνάμεως εἰς δύναμιν (力から力へ)
II コリント 2:16	ἐκ θανάτου εἰς θάνατον (死から死へ)
II コリント 3:18	ἀπὸ δόξης εἰς δόξαν (栄光から栄光へ)
II コリント 4:17	καθ' ὑπερβολὴν εἰς ὑπερβολὴν (並外れている上に並外れて)

また、U. Wilckens は一つの句としての修辭的定型句的表現を否定はしないものの、ἐκ πίστεως と εἰς πίστιν とを分け、εἰς πίστιν に独自の意味がないか検討を加えた。そして、「信仰の成長を考慮に入れている」ような内容は前後の文脈に暗示されていないので、εἰς πίστιν はむしろ「強調」と注解している<sup>28</sup>。一方、J.D.G. Dunn はより明快に、ἐκ A εἰς B を起点 (A) と帰結点 (B) を示す方向性としている<sup>29</sup>。M. Wolter は、起点 (A) と帰結点 (A') が同じであるので、「最初から終わりまで」という一体性が強調されているとする。したがって、繰り返しは「とことん信仰そのもの」を示すと釈義している<sup>30</sup>。一方、J.W. Taylor は ἐκ A εἰς A' の言い回しは、動き、時間の延長、成長、増幅を示し、信仰の広がりを意味するとしている<sup>31</sup>。同様に、R. Jewett も成長、転換、

26 E. ケーゼマン『ローマ人への手紙』68-9. (必要に応じて E. Käsemann, *An die Römer* [4., durchgesehene Auflage] を参照した。以下同じ)。「すなわち、これは《信仰のみによって》の意味で強調に『断絶のない連続性』、なおもっと適切には『新しい世界の次元』をきわ立たせているのである」

27 マソラ本文 (MT) および新共同訳 84:8.

28 U. ヴィルケンス『EKK 新約聖書註解 VI/1: ローマ人への手紙 (1-5 章)』118. 「パウロはここで『信仰の成長を考慮に入れている』というようなことは前後の文脈において全然暗示されておらず、またパウロの思想としてそのようなことはその他のテキストのどこにも見出されない。それに反して不可能でないのは、『この副詞的言い回しによる (信仰の) 強調はより完全な言い回しを短縮したものである』という解釈である」

29 J.D.G. Dunn, *Word Biblical Commentary: Volume 38A, Romans 1-8*, 43-4; 田川建三『新約聖書 訳と註 4 新約聖書 訳と註 4: パウロ書簡 その二／擬似パウロ書簡』117-8. 17 節 a の文の主動詞は「啓示される」である。「啓示する」「明らかに示す」という動詞は、「A から B へと示される」ものであって、「A から A 自身へと示される」ではまるで通じない。同じものを二つ並べて「A から A へ」というのは「徹頭徹尾 A である」の意味になり、こじつけになるとする。「～から～へ」は常識的には出発点と終点は違うものである。したがって、「神の信実から神の信実へと」ないし「人間の信仰から人間の信仰へと」と同じものを二つ並べるのでは論理的には通じないとする。

30 M. Wolter, *Der Brief an die Römer: EKK NF VI/1*, 125-6.

31 J.W. Taylor, *From Faith to Faith: Romans 1.17 in the Light of Greek Idiom*, NTS 50, 337-48. ヨアンネス・クリュソストモスのような旧約から新約への救済史として捉えるのではなく、キリスト者の信仰が異邦人の中でだんだんと拡がる様を示しているとする。

動きを示すもので、ユダヤ人からの宣教の拡がりとは注釈している<sup>32</sup>。C.L. Quarles はギリシャ教父たちの様々な解釈に着目し、彼らが信仰を動的なものと捉えていたことを明らかにしている<sup>33</sup>。以上、ヨアンネス・クリュソストモスの「古い信仰から新しい信仰へ」という注釈<sup>34</sup>から M. ルターに至るまで<sup>35</sup>、ἐκ Α εἰς Α' の解釈にはプロセス・方向性が見られると結論づけられる。

### 3. イザヤ書 51:1-8 との関連

ここで単なる修辞学的繰り返しでなく、方向性があると仮定した上で、16-7 節のコンテキストを確認する。まず、16 節において、救済の流れは「第一にユダヤ人にとって、続いてギリシャ人に」という、ユダヤ人からギリシャ人に代表される異邦人へという方向性が明確に認められる。したがって、ἐκ Α εἰς Α' の構成は「ユダヤ人からギリシャ人へ」という流れの文脈にあるかどうか、七十人訳 (LXX) のイザヤ書 51 章<sup>36</sup>と比較検討した結果、51:4-5<sup>37</sup>において、前置詞句の関連性に加えて、口

32 R. Jewett, *Romans: A Commentary (Hermeneia: a critical and historical commentary on the Bible)*, 143-4.

33 C.L. Quarles, *From Faith to Faith: A Fresh Examination of the Prepositional Series in Romans 1:17*, NT 55, 1-21.

34 R.M. Calhoun, *Paul's Definitions of the Gospel in Romans I*, 178-80.

35 M. ルター『ローマ書講義 上巻 (ルター選集 別巻 2)』34-6; M. ルター『ローマ書講義 上 (ルター著作集 2/8) 234. M. ルターは救済史的には「神の義は全く信仰による」と理解するものの、"ex fide in fidem" は信仰の生長 (proficiendo) と解釈している。「常にますます信じるようになる (中略) より明瞭な信仰になる (semper magis ac magis... in clariorem fidem)」と注釈している。しかし近世以降、「信仰のみ (sola fide)」として信仰を強調する解釈が主流となった。

36 C. ヴェスターマン『ATD 旧約聖書註解 19 (イザヤ書 40-66)』398-408; J.F.A. ソーヤー『イザヤ書 II (The Daily Study Bible 18)』179-183; R.N. ワイブレイ『イザヤ書 40-66 章 (ニューセンチュリー聖書註解)』184-8. 第二イザヤ 51:1-8 の単元は 1-3, 4-6, 7-8 の 3 つの預言から成る。צדק (義) ないし צדקה (正義) が 5 回 (1, 5-8) 繰り返され、互いに繋がられている。1-3 においては「主を追い求める人」の起源を思い起こさせ、アブラハムとサラが父祖であり、その子孫に対する約束について言及される。4-6 においては、語りかけられる集団が「主を求める人々」から「異邦人 (諸国)」へ、「島々」へ拡大する。救済が普遍的で永遠であることの宣言がなされ、「神の光」が諸国へ広がる。7-8 では律法を自分の心のうちに持つ人に対しての救いの永遠性が述べられる。ただし、ヴェスターマンは加筆を想定しており、3 つの預言は① 51:1a; 50:10-11, ② 51:4-6, ③ 51:7a, 1b-2, 7b-8 であり、「ほめ称えの歌の断片」として 51:3 が付加されていると解釈する。

37 イザヤ書 (LXX) 51:4-5 <sup>4</sup> ἀκούσατέ μου ἀκούσατε, λαός μου, καὶ οἱ βασιλεῖς, πρὸς με ἐνωτίσασθε· ὅτι νόμος παρ' ἐμοῦ ἐξελεύσεται καὶ ἡ κρίσις μου εἰς φῶς ἐθνῶν. <sup>5</sup> ἐγγίξει ταχὺ ἡ δικαιοσύνη μου καὶ ἐξελεύσεται ὡς φῶς τὸ σωτήριόν μου, καὶ εἰς τὸν βραχίονά μου ἔθνη ἐλπιούσιν· ἐμὲ νῆσοι ὑπομενοῦσιν καὶ εἰς τὸν βραχίονά μου ἐλπιούσιν.

《私訳》<sup>4</sup> 私に聞け! 私の民よ、聞け! 王侯たちよ、私に耳を傾けよ! 律法は私から出て行くであろう、そして私の裁きは諸国民 [異邦人] の光へと (出て行く) ということを。<sup>5</sup> 私の義はすみやかにやって来、私の救いは光のように出て行くだろう、そして私の腕へと諸国民 [異邦人] は望みを置くだろう。島々は私を待ち望むだろうし、そして私の腕へと (島々は) 望みを置くだろう。

マ書の中心的な神学的モチーフとの相関が浮かび上がった<sup>38</sup>。

51:4 においては、ἐξελεύσεται ~ εἰς φῶς ἐθνῶν と ἐκ A εἰς B の構文が認められる。続く、51:5 においても、ἐξελεύσεται ~ εἰς τὸν βραχίονά μου と ἐκ A εἰς B の構文が繰り返されるのに加えて、「私 [神] の義 (ἡ δικαιοσύνη μου)」<sup>39</sup> がすぐに実現するであろうこと、そして、神の救い (τὸ σωτήριόν μου) が島々へ、異邦人のもとへと光のごとく行き渡る様が述べられている。両節とも、向かう先は異邦人 (ἐθνῶν ないし ἔθνη) で一致している。また、51:5 の「島々 (κῆρυξ は第二イザヤで 9 回<sup>40</sup>、νῆσοι は同 8 回<sup>41</sup>)」は第二イザヤの終末論的用語で、しばしば「地の果て (ἡ ἀκροῦ τῆς γῆς / ἀπ' ἄκρων τῆς γῆς)」や「裁き (κρίσις / κρίσις)」と意味領域 (semantic field) を構成する。「島々」は具体的にどこを指すかは諸説<sup>42</sup> あるが、地中海が視野に入れられており、全世界の救いを想定する普遍性を意味する用語である。

51:5 においては「私 [神] の義 (ἡ δικαιοσύνη μου)」と「私 [神] の救い (τὸ σωτήριόν μου)」が同義的に使われている<sup>43</sup>。ゆえに、ロマ書 1:16 で展開される「義 = 救い」の構図は第二イザヤを踏まえているといえる。また、パウロは 51:4 の「聞け! (ἀκούσατέ)」というコンテキストから、「私 [神] の義 (ἡ δικαιοσύνη μου)」は「言葉によって形成される信仰 (fides verbo formata)」<sup>44</sup> であることを読み取っているといえる。

次に救済の起点を検討する。51:4 において律法は、「私 [神] から出て (νόμος παρ' ἐμοῦ ἐξελεύσεται)」、「私の民 (λαός μου)」であるイスラエルを越えていくことが示さ

38 NA28 は関連箇所として詩 97:2 [MT98:2]; イザ 51:5-8 を挙げている。NA28 以外にロマ 1:17a とイザヤ書 51 章との関連を指摘している注解書は限定的である。J.D.G. Dunn, *The New Perspective on Paul* (Rev. Edn.), 207, 250, 370. 義認の背景としての関連で第二イザヤ 51:5-8 を指摘はするが、ロマ 1:17a への構文的な類似性までは触れていない; R.B. Hays, *Echoes of Scriptures in the Letter of Paul*, 37. 1:16-17 において、詩 97:2 [MT98:2]; イザ 51:4-5; 52:10 が間テクスト的に響いているとする; M.A. Seifrid, *Justification by Faith: The Origin and Development of a Central Pauline Theme*, 216-7. NA28 と同じ詩 97:2 [MT98:2]; イザ 51:5-8 を指摘をしている; 原口尚彰『ローマの信徒への手紙 上巻』71. 上記の R.B. Hays と M.A. Seifrid を引用する; J.W. Taylor, *From Faith to Faith: Romans 1.17 in the Light of Greek Idiom*, NTS 50, 337-48. 詩 97:2 [MT98:2]; イザ 51:4-8; 52:10; 53:1; 56:3-8 との関連についてより細かく言及。イザ 51:4-5 に「義」と「救い」の組合せが 3 回あることを指摘するものの、文法構造にまでは触れていない。

39 ἡ δικαιοσύνη μου は 51:6, 8 にも認められる。51:8 には τὸ σωτήριόν μου も認められる。

40 イザ (MT) 40:15; 41:1, 5; 42:4, 10, 12, 15; 49:1; 51:5.

41 イザ (LXX) 41:1; 42:10, 12, 15; 45:16; 49:1, 22; 51:5.

42 *Theological Lexicon of the Old Testament, A Concise Hebrew and Aramaic Lexicon of the Old Testament* によると、「地中海を見据えた島々」。もしくは「沿岸の諸国 (海沿いの国々)」とも訳される。後者の場合、沿岸の敵の国々 (ペリシテなどを想定) にまで YHWH の栄光が拡まっていくという意味となる。

43 J.D.G. Dunn, *The New Perspective on Paul* (Rev. Edn.), 207.

44 E. ケーゼマン『パウロ神学の核心』143.

れている。先立つ 51:1<sup>45</sup> において救いの起源が、採石場の比喩から明確に言及されている。続く 51:2 においてはその起源がアブラハムとサラであることに言及され、アブラハムは祝福（εὐλόγησα αὐτόν）の上、彼（の子孫）が増し加えられる（ἐπλήθυνα αὐτόν）<sup>46</sup>。

このように、救済には方向性があり、それは神から発出されアブラハムから「私の民」を越えて、異邦人へ・島々へという、起点（A）から帰結点（B）へという構図で成立していることが明確に認められた。ところで、今日のマソラ本文（MT）は LXX のイザヤ書の翻訳元ではない<sup>47</sup>。MT の 51 章は黙示思想的文脈ではあるものの、普遍性は LXX ほども強く打ち出されていない<sup>48</sup>。一方、タルグム・ヨナタンとしての最終的な成立は 5 世紀と考えられているものの、後預言書の翻訳（タルグム）はパウロと同時代にほぼ終了していたとされる。タルグム・ヨナタンの 51:4 では、「律法は私〔神〕の前に出て行く」とあり、異邦人への視点が著しく後退しており内向きである<sup>49</sup>。したがって、ヘブル語テキストや当時のタルグムからではなく LXX から、「私の民（λαός μου）であるイスラエルのみならず世界が救われるという第二イザヤの福音<sup>50</sup>とその普遍性<sup>51</sup>を、パウロは 1:16-17 に読み込んでいることが示唆される。ロマ

45 イザヤ書（LXX）51:1-2 ἰσχυροὶ μου, οἱ δυνάστες τοῦ δικαίου καὶ ζητοῦντες τὸν κύριον, ἐμβλέψατε εἰς τὴν στερεὰν πέτραν, ἣν ἐλάτομήσατε, καὶ εἰς τὸν βόθρον τοῦ λάκκου, ὃν ὠρύξατε. ἔμβλεψατε εἰς Ἀβραὰμ τὸν πατέρα ὑμῶν καὶ εἰς Σαρραν τὴν ὠδίνουσαν ὑμᾶς· ὅτι εἰς ἡν, καὶ ἐκάλεσα αὐτὸν καὶ εὐλόγησα αὐτόν καὶ ἡγάγησα αὐτόν καὶ ἐπλήθυνα αὐτόν.

《私訳》「義を追い求める者たちよ、主を尋ね求める者たちよ、私に聞け！あなた方の切り出された硬い岩に、あなたがたの掘り出された井戸の穴に、目を留めよ！<sup>2</sup>あなたがたの父アブラハムに、あなた方を産んだサラに、目を留めよ！彼がただひとりであったので、私は彼を召し、彼を祝福して、彼（の子孫）を増し加えたのだ。

46 51:1a にある、τὸ δίκαιον は中性対格（形容詞）であり、意味も「義人を」ではなく「義を」である。したがって、οἱ δυνάστες τοῦ δικαίου は「義を追い求める人たち」になる。51:1-2 において、「アブラハムと義」という構図がみてとれる。

47 M. ヘンゲル『キリスト教聖書としての七十人訳』99-102; F. ハーン『新約聖書神学 II 上』101-2; 左近淑他『総説旧約聖書』597-606; J.C. ヴァンダーカム『死海文書のすべて』230; W.H. シュミット、W. ティール、R. ハンハルト『コンパクト旧約聖書入門』296-8; E. ヴェルトヴァイン『旧約聖書の本文研究：「ピブリア・ヘブライカ」入門』84-108; 土岐健治『七十人訳入門』113-8; 秦剛平『七十人訳ギリシア語聖書 イザヤ書』322-30. 今日、LXX 写本には 4 系統（アレクサンドリア型本文・ヘクサプラ型校訂本・ルキアノス校訂本・カテナグループ）が認められる。パウロの時代において、LXX には既に複数の系統があった。前 3 世紀から始まるギリシア語への翻訳は、原マソラ [proto-Masoretic text] とは異なるヘブル語テキスト（原七十人訳 [proto-Septuagintal text]）からなされた。パウロの時代、特に LXX の預言書においては、ヘブル語本文との著しい相違から、ヘブル語本文に近づけようという努力もなされていた。パウロはユダヤ人との議論においては、修正した LXX をむしろ引用（もしくは独自に翻訳）していたことが指摘されている。

48 K. Baltzer, *Deutero-Isaiah: a commentary on Isaiah 40-55 (Hermeneia: a critical and historical commentary on the Bible)*, transl by M. Kohl, 349-54.

49 A. Sperber ed. *The Bible in Aramaic vol. III: The Later Prophets According to Targum Jonathan*, 103-4; B.D. Chilton, *The Aramaic Bible: The Targums vol. II The Isaiah Targum*, 100. 5 節の「島々は私の Memra（ヤハウェの言葉）を待ち望む」のコンセプトは、タルグムでもそのままである。

50 H-J. Kraus, *Das Evangelium der unbekannten Propheten: Jesaja 40-66*, 130-3.

51 J. Blenkinsopp, *Second Isaiah-Prophet of Universalism*, JSOT 41, 83-103; K. コッホ『預言書 II』273.

書 1 章においては、現在の現実となった救いは、時間軸に続いて空間的拡がりのもとで方向付けられ、再解釈された上で展開されている。以上、1:17a と神学的モチーフ並びに構文において関連性が認められる。

以上、δικαιοσύνη θεοῦ が示す現在の終末論の構図が、17 節 a の救済論的な空間の拡がりとは時間軸の融合から成っていることが、本研究において初めて示された。なお、イザヤ書 51:1-8 の單元にはメシア論的側面は見出せなかった。ロマ書 1:17a はイザヤ書 51:5 から、コンテクストを含めての援用がなされている。1:17a の ἐκ πίστεως εἰς πίστιν は、イスラエルから異邦人へという方向性・救済史的流れ、並びに、救済の普遍性が示されており、ここに新たな解釈が可能となる<sup>52</sup>。

#### 4. 「救済の方向性」を示す ἐκ πίστεως εἰς πίστιν として

さて本研究において、ἐκ πίστεως εἰς πίστιν の分析を通して第二イザヤ (LXX) の 51:4-5 と 1:17a との密接な関連性が明らかになり、より具体的に δικαιοσύνη (義) の方向性が示された。まず、ロマ書 1:16 から、σωτηρία (救い) には「神から人へ」と、「信じる者全てへ」向かう方向性が認められ、それは「まずユダヤ人からギリシャ人に代表される異邦人へ」という展開を示していた。

ここで、1:16 での救済の方向性が、直接的に 1:17a の文脈でも認められるか検討したい<sup>53</sup>。ロマ書において、ユダヤ人の πίστις (πίστις Ἰουδαίου) 並びにギリシャ人の πίστις (πίστις Ἑλληνος) といった表現はないことから、1:17a の ἐκ πίστεως εἰς πίστιν は、「ユダヤ人の πίστις (ἐκ πίστεως Ἰουδαίου) からギリシャ人の πίστις (εἰς πίστιν Ἑλληνος) へ」を意味してはいないと思われる。

しかし、第二イザヤ (LXX) の 51:2 および 4-5 の、「神からの義すなわち救いはアブラハムを起点とし、私の民から異邦人へ向かう」のコンテクストが、直接 17 節 a に関連付けられていることは、新たな解釈を提示する。また、同じ單元を構成しているロマ書 1:5 においても、「全ての異邦人において、信仰の従順へ至らせる (εἰς ὑπακοὴν πίστεως ἐν πᾶσιν τοῖς ἔθνεσιν)」と「異邦人の πίστις」への言及がなされている。加えて、ロマ書 4 章におけるアブラハム物語から、4:16 では「アブラハム (に代

52 R. Jewett, *Romans: A Commentary (Hermeneia: a critical and historical commentary on the Bible)*, 143-4. 「福音の異邦人への拡がり」への指摘はするものの、救済史的な側面にまで言及していない。また、イザヤ書 51 章との関連にも着目していない。

53 R.M. Calhoun, *Paul's Definitions of the Gospel in Romans 1*, 153, 169-87. 教父たちの ἐκ πίστεως εἰς πίστιν の解釈「旧約から新約へ」を検討することで、「ユダヤ人からギリシャ人へ」の解釈の可否を考察している。

表されるところ)の信仰から (ἐκ πίστεως Ἀβραάμ)」について述べられる。そこでは、アブラハムは多くの民の父 (πατέρα πολλῶν ἐθνῶν) であり、全ての子孫に約束が保証 (βεβαίαν τὴν ἐπαγγελίαν παντὶ τῷ σπέρματι) されるのである。ロマ書 4 章で展開されるアブラハム物語は、πίστις が「約束を守る神の確かさと、葛藤しつつもそれに無条件で従うアブラハムの信頼から成り立っている」ことを示す。特に、4:21 において「神は約束したことを実現することでもできる (ὁ ἐπήγγελται δυνατός ἐστιν καὶ ποιῆσαι)」と、πίστις の内容をパウロは明らかにしている。私たち全ての者の父 (πατὴρ πάντων ἡμῶν) であるアブラハムの πίστις は、イスラエルのみならず異邦人の救済を可能にする。パウロは、51 章の「アブラハムから異邦人へ」という第二イザヤのモチーフを利用して、πίστις を用いての、救済史的な流れの再解釈を 1:17 で行っている。以上の方向性とロマ書 1 章前半の文脈を鑑みると、17 節 a は「アブラハムの信仰から (ἐκ πίστεως Ἀβραάμ)、アブラハムの子孫である異邦人の信仰へ」を含蓄しているものとして解釈できる。したがって、既存のいずれの読みではなく新たに、「アブラハムの信仰から、異邦人の信仰へ」とのプロセスを提案したい。

したがって 17 節は、「なぜなら、神からの義はその〔福音の〕中に、アブラハムの信仰から、異邦人の信仰へと、啓示される。『信仰からの義人は生きるであろう』と書いてあるように」と読める。